HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	1980年代以降の中華圏映画における批評性［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	劉, 洋
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12381号
Issue Date	2016-09-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/63443
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Yang_Liu_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　劉　洋

主査　教　授　　応　雄
審査委員　副査　准教授　阿部　嘉昭
副査　教　授　武田　雅哉

学位論文題名

1980 年代以降の中華圏映画における批評性

現代中国映画、ひいては現代中華圏映画に関する学術的研究は、これまで、旧来の社会反映論のアプローチと、とりわけ北米で多く見られるイデオロギー分析やポストモダン、ポストコロニアル理論、カルチュラル・スタディーズといった視点から考察するアプローチと、主としてふたつの傾向がある。新旧二通りのアプローチは互いに異なるものの、優れた映画の作り手を創造的な活動を行なう作家と見なし、映画作品に内在する芸術表現の力に目を向ける視点が欠落しているところに、両者の共通している点がある。本研究は、「作家主義」の観点に立ち映画作品の創造的力に目を向けるが、それだけでなく、あくまで研究対象である現代中華圏映画の文脈に即しての作家論的な考察を行なっている。この意味では、本研究は、現代中華圏映画の文脈における「作家主義」の新たな展開の諸相貌をめぐる考察と見てもよい。作家の個性、創造性を重視するスタンスと、「作家主義」、「映画作家」のコンセプトと現代中華圏の具体的な歴史的文脈を相互的に参照させつつ検証する研究方法は、これまで当該研究領域で主流をなしてきたアプローチとは一線を画すものとして評価に値する。

次に挙げるべき成果は、それぞれの作家を取り上げる過程で映像と音声という映画メディアに固有の表現要素に着目し、それらの諸要素および作品におけるその諸機能について綿密なテキスト分析を行なった点にある。陳凱歌作品についての検討では、物・音の物質的存在感が分析の焦点となり、賈樟柯の作品、とりわけ前期の「故郷三部作」をめぐる考察では、汾陽をはじめとする山西省の町を即物的に映し出しており、中国映画ニュー・ウェイヴを代表する作品のひとつである陳凱歌の『黄色い大地』以上に物・音の物質的存在感を際立たせることに注目し、雑多なるものと雑音をいかした賈樟柯作品の表現面での特徴について子細な考察を加えた。あくまで映画作品を映画たらしめる映像と音声の側面に即して分析するという本論文のこだわりは、映画作品を内在的に分析する強みを示すとともに、社会批評や文化批評を視野に入れる考察を行なう際にも、論述の信憑性や説得力を増強するものとなる。

また、第三章と第四章で展開した賈樟柯作品に関する考察は、中国で作品公開禁止が解除された直後に制作された『世界』を境目に、『世界』以前と『世界』以降とにわけて考察しているが、これは当を得たものである。中国国内・国外の研究や言説を問わず、みずからの抱く現代中国イメージと重なり合う度合を基準にして作品を批評しがちであった一部の先行研究のスタンスに違和感を覚えた申請者は、都市と農村のあいだに位置し、それまであまりスクリーンに登場してこなかった田舎町の表象、社会の低層にありながらもいきいきとする弱者の表象、異質な他者なるものの存在、演出上の即興性、イタリアのヴィットリオ・デ・シーカ、フランスのロベール・ブレッソン、台湾の侯孝賢（ホウ・シャオシェン）から受ける影響、作中に込められる日本の小津安二郎へのオマージュ

といった、内容と表現にかかわる諸側面について精査した。このことを通して、現代中国を代表するといわれるこの映画作家の肖像、また、現代中国映画における賈樟柯映画の位置づけ、ならびに世界映画史における他国の映画作家との継承関係を明らかにするとともに、たとえば近代中国の文学者である魯迅の文章から得た中国イメージを現代中国の映画作品に当てはめようとするような言説にたいして疑問を呈し、方法論における再検討の必要性を促すものとなった。

審査委員会は上記の三点を評価するかたわら、本論文に残る問題点についても指摘した。社会的、文化的、美学的な批評性に富む現代中華圏映画の創造的な部分について考察を行なうにあたっては、たとえば近年海外でも大きな関心を寄せる王兵監督の作品を研究対象に収めていない点に検討の余地が残る。また、批評性という点に関しては、社会批評と文化批評と美学批評のそれぞれの機能、三者間の棲み分けと関連性といった点についてより明確に記述することで論文の説得力をよりいっそう高める余地もあった。さらには、香港の陳果と台湾の楊徳昌の作品における救済のテーマを考察し、それを中国本土の映画作家たちの問題関心と響き合わせるという論考の構成と結び方は、論文全体の一貫性を持たせる点において有効であると認められつつも、このテーマがニュー・ウェイヴ以降の現代中華圏映画においていかなる歴史的展開・変奏をみせてきたかについての記述と検討が十分とはいえない。しかしながら、そういった問題点は、本論文が有する歴史的・地理的射程の長さと広さに、また研究課題の新規性に由来し、この研究がなされてから新たに生じた課題であって、本論文が達成した成果を損なうものではない。これらの問題点は申請者がこれから本テーマの研究をさらに進める際に改善されうるものと考えられる。

本審査委員会は以上の審査結果に基づき，全員一致で，劉洋氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。